

菅原道明市政報告

# 市議会の議論の構造





## はじめに

日頃よりご支援をいただき、心より感謝申し上げます。市議として一年三ヶ月が経ちました。一年生議員という立場で、まだまだ未熟ではありますが、日々の活動の中で、たくさんの気づきと学びをえております。

「議会というのは正直なところ、何をしているかよくわからない。」これが一番の課題だと思っております。一方で、政治に対する関心が高まっているのを感じています。昨年の参院選と今年の衆院選。新潟県では昨年の柏崎刈羽原発の住民投票の是非と、知事の判断。

この報告では、これまでの議会での議論や活動を振り返りながら、現場で感じたことも含めて整理しました。ある意味で自身の備忘録的なものになりますが、これまでの総括として、共有させていただき、ご意見等いただきたいと思います。

## 目次

はじめに	1
市議会の議会の構造	2
人口減少	3
公共施設の維持管理	4
農業の問題	6
給食費無償化	7
「あがのポイント」	9
議論の練習	10
あとがき	12

## 市議会の議論の構造

以前から、議会が何をしているか、よくわからない、ということに課題を感じていて、それは市議に立候補する動機のひとつであった。これまでの議会での議論を整理してみると、この問題は結構、根が深いと感じている。市議会の議論が極端に少ないと感じている。議会は全体で議論を行う場合と、二つの常任委員会という部会で議論を行う場合がある。そのいずれにおいても議論が足りていないというのが現状である。

私が所属しているのは産業厚生常任委員会、文字どおり産業分野、厚生分野を担当し、もう一方は、総務文教常任委員会といい、総務、文教の分野を担当する。阿賀野市議会は、議員数が十六名であるため、ざつくりと二常任委員会で構成されているが、他市でもっと議員数も多く、委員会も細分化されていて、おそらく議論も丁寧なされていると想像する。

常任委員会において、ちようど米騒動がメディアを騒がせていたことから、阿賀野市の農業について議論してはどうか、と提案したところ、ある議員から、それは一般質問でやるから、委員会を取り上げる必要はない、という趣旨の発言があった。そのことに非常に違和感を覚えた。そして、そのモヤモヤを言語化できずにいたが、後から、おそらくこれが市議会の議論の構造的な問題なのだということに、気がついた。

議会の定例会においては、議員の一般質問が設けられていて、これは各議員が市政全般について市長や執行部に対して直接質問するものである。各議員の視点から、あるいはその所属する党派から、それぞれの分野において質問がなされる。確かに、一議員として大事な仕事のひとつではあるのだが、それをもって委員会の議論を不要とするのは、これまでの議会のあり方を問わねばならないのではないか。

一般質問等で、一方的に市長や執行部に質問、提案として、言葉を投げつけ、それに同意しないといっては、市長や執行部の態度は、けしからん、というその態度こそ、ここ最近の問題になっている、リベラルの凋落と同

じロジックなのではないか。

地方議会は二元代表制といって、市長と市議会議員をそれぞれ選挙で選び、その両方が市民の代表であり、市長が行政の長として政策を立て、市議会がそれを決定する。つまり、市の政策を決定しているのは市議会なのである。

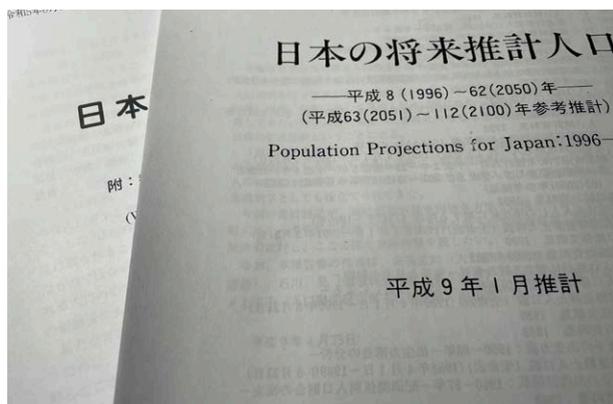
確かに一議員として、パフォーマンスとしてそういった演出をしてみようのは仕方のないことだと理解はできるものの、委員会や本会議での議論を蔑ろにされては、議会の存在自体が疑われかねない。

## 人口減少について

ここで、これまでの議会での議論の中心となった議論の中から、気になったものをいくつか取り上げて整理したい。

人口減少は、おそらく最も議会で使用されたキーワードであろう。議員の発言だけでなく、市長の市政方針にも必ず取り上げられる人口減少。個人的には人口減少には課題を感じていなかったわけだが、議員になって頻繁に繰り返される議論に、だったら特別委員会を立ち上げて、集中的に議論しましょうよ、と設立を提案した。

本来、人口減少という問題については、中長期的な視点で考える必要がある。前提として、人口減少は人類の構造的な問題であることを理解する必要がある。その上で、日本の独自の問題として、東



人口減少は平成9年からあった

京都への一極集中、氷河期世代の非正規雇用の問題、日本独特のジェンダー問題があげられるかもしれない。

しかしながら、人口減少として議会で語られるのは、出生数の低下だけなのではないか。毎月の阿賀野市の広報で取り上げられる出生数という短期の数値だけで、大袈裟に危機感を煽るだけのパフォーマンスなのではと、疑ってしまう。出生数低下という数値に踊らされてしまい、子育て支援の拡充、教育費無償化と効果があるのかないのかも検証されなまま垂れ流されているのが現状だ。EBPM(エビデンス・ベースト・ポリシー・メイキング)。証拠に基づく政策立案といわれて久しいが、定量で計測されてもいない、定性で分析されてもいない。とはいえ、このことに私自身、正しい答えを持っているわけではないので、今後も特別委員会での議論を深めていきたい。

## 公共施設の維持管理

次に多かったのが、公共施設の維持管理。以前から、廃校施設の再利用が進まない、安田地区の赤松荘、水原地区のリズムハウスの公共施設の指定管理の問題があったわけだが、公共施設の管理計画において、突如として見直しがなされ、廃止であった安田体育館、維持であった福祉会館が、安田体育館を改修、福祉会館を廃止という全く反対の方針が示された。

安田体育館は維持という方針が示されたからいいとして、福祉会館にいたっては地元議員から意見が噴出し、もはや炎上ともいえるような状態になった。

安田体育館は、老朽化に加え、人口減少というトレンドの中で、廃止という方針であったが、中学校の部活の地域移行を進めるうえで、体育施設の不足という問題が生じた。将来的に人口減少という流れは変わらないものの、中期的な目標である部活の地域移行の妨げになることから、方針転換と私は理解している。

一方で福祉会館は、その躯体の構造から維持するコストが大きく、しかも近隣の施設で代替可能という判断から、廃止に至った。

では、ここでいったい何が問題となるのかを整理したい。

まず一つ目はタイミングの悪さ。なぜこの計画の方針転換の発表を、しかも同時にする必要があったのか。福祉会館の廃止に反対するのは地元水原地区から選出された議員だけで、当然の結果であるといえる。これは単純に市の施策云々というよりは、説明のマズさとしかしいようがない。

次に注目したいのは、福祉会館の人気の高さである。公共施設として市の中心部に位置し、地元住民からはアクセスのしやすさがその特徴であろう。利用者数として比較すると見えてこないが、こじんまりとして利用しやすいところが、近隣の住民から支持されていると想像するが、確かにこの辺は定量分析には反映されない魅力といえる。利用者数という単純な数値だけで、それが置き換え可能な施設であると判断したのはいささか安易であつたといわざるを得ない。

もう一つはある議員からの指摘について考えたい。安田地区は人口減少が著しいため、その安田地区のインフラを維持することは合理的ではない、という意見。こういう長期的な視点での議論は鋭い指摘であると思う。投資対効果、その投資がもたらす効用は中長期にわたり分析する必要があるからだ。しかし、長期的に人口減少するから、施設は不要だというロジックは、建設費は長期的に効用が得られるとして、ハコもの行政を是としてきた過去があり、そのロジックと同じではないか。長期的視点も必要、中期的視点も必要、短期的視点も必要、であつて、それらを行ったり来たりしながら、



水原福祉会館（阿賀野市 HP より）



稲刈り、五頭山への眺め

議論を重ねることがこれまで欠けているところで、どちらか一方でもって、その是非は決められないはずである。

## 農業の問題

令和の米騒動、とメディアで騒がれ、突然の注目を浴びるようになった農業問題については、以前から不思議に思っていて、個人的には農業に問題はないと考えている。自分自身も農事組合法人を経営している立場として、農業に問題があるのであれば危なっかしくてやっていけない。

令和の米騒動については、そんなに難しい話ではないと思っています、まず令和五年の猛暑がその原因ではないか。新潟県をはじめ、猛暑により米の等級が下がってしまった。弊法人も影響を受けていて、緊急融資をお願いして資金を確保したくらいで、当然、市場においても米の品薄状態が生じていたわけである。そこで集荷に力を入れて令和六年産米は買い集められた。主食用米だけでなく、加工用米や酒米にまで、影響を与えて、令和七年産については、米を買い集められなかった農協が、春の出荷契約の段階で三万円という金額を提示してきた。当然、市場はそれをアンカーにして、農家の囲い込みが行われた。これが令和の米騒動の問題の構造となっているが、現実の検証にはいたっていないので、一つの意見としていただきたい。

農業の問題について語られるとき、農業の問題というよりは、その他の問題が複雑に絡み合って、農業と一括りにされてしまっているのが問題だと思っている。

一つは農業の跡継ぎ問題。農業従事者の高齢化は以前から問題視されてきたところだが、それを担ってきた団塊の世代が七十五歳を超える今、農業の担い手がいけないというのが、この問題である。しかし、農業従事者の高齢化自体は依然としてあるものの、担い手の問題は、そもそも農地の多い地方の人口減少が問題なのであって、他産業においても同様に問題視されているわけで、ことさら農業だけが大変ということにはならない。

それから、関連して農業、儲からない問題。昨年の米価が上がったとはいえ、コメ余りという現実がある中、手放して喜べない状況である。別のところ（※1）で書いているので、ここでは割愛するが、ある程度の事業規模がなければ、損益分岐点を超えられないというのがこの問題の本質であり、オーガニックだ、米価だ、というのは枝葉の問題である。

最後に、食の安全保障の問題。今回の米騒動でも繰り返されるキーワードだ。これについては、国でしっかりと議論してもらいたい。市場に任せるのはいいとして、米農家が、儲からないからと、花をつくりはじめたらどうするのだろう。グローバル経済を推し進める中で、日本の農業はその割を食ってきた。しかし、自動車売って、農産物を買う時代ももう終わっていて、というよりは、日本が農産物を買えない時代になってしまっている。ウクライナや中東の現状も合わせて考えると、日本が喫緊に取り組む問題であると考ええる。

## 給食費無償化

給食費の無償化については、先の議会において実現されない決議がなされたものである。議会において否決されたものの、賛否いろいろあって、議会においてその爪あとの深さを感じている。少子化対策として、重要な位置づけとされている給食費無償化、はたして給食費無償化に一体、何を期待しているのだろうか。



安野小学校の給食（安野小学校のHPより）

なぜにこれまで給食費無償化について語られているのかを理解し  
たくて、藤原辰史著「給食の歴史」（※2）を手にした。給食をめ  
ぐるこれまでの取り組みが社会と無関係でなかったという点におい  
て、勉強になった。第一章だけでも給食についてのまなざしが変わ  
るので、立ち読みでもおすすぬしたい。（よくない。）

日本の給食の歴史はそれに委ねるとして、それを前提に給食に  
ついて考えたい。給食にはいくつものレイヤーがあつて、それぞ  
れの文脈で考える必要があるが、議会でなされる議論はとても単純で  
ある。

給食は教育であるから、無償化すべきだという主張。とはいえ、  
教育にお金がかからない、とはなっていない。給食費も同じで、受  
益者負担という原則にのっとれば、食材費は負担するというのがこ  
れまでの考えであつたはずだ。以前からこの議論はあるものの、個  
人的な経験から考えると、保育費無償化がその口火でなかつたか。  
そこから、子育て支援は負担軽減という方向に舵を切つたかと思え  
る。子どもの医療費の負担減が図られ、保育料も軽減され、今では  
それらの支援は拡充され、今でもまだ足りないという空気が支配し  
ている。

なんとなく給食費無償化がもたらすイメージ。なんとなく子育て  
充実してそう、なんとなくよさそう、なんとなくみんながのぞんで  
う、という印象操作の産物なのだろう。

## 「あがのポイント」

最後に「あがのポイント」について取り上げたい。自分も一般質問で取り上げたところであるが、主訴としては、もっと活用の仕方があったのではないか、という点で、それを評価できない執行部の体制について、問うたものだ。しかし、この事業については再三にわたり行政改革委員会から指摘されており、それでも改善の余地がないとした時点で、継続することの合理性はないと判断されたものである。

この議論の発端は、この事業を維持することの請願に対して是が非かを判断することであった。請願というかたちでの市民の声。これを議会にあげるとは市議会議員として、重要な仕事のひとつである。もちろん、請願にかかわらず、市民ひとりひとりの声も同じだ。しかし、一方で、市政の是か非か決定するのも市議会の仕事である。

この度の請願については、この報告のテーマである市議会の議論の構造について、随分と考えさせられた。

---

※1 行政書士菅原道明事務所ブログ <https://www.sghmchk-office.com/blog048/>

※2 藤原辰史 『給食の歴史』 二〇一八 岩波新書

## 議論の練習

表紙のイラストは、海賊というテーマで、AIに生成させたものだ。古代ギリシアにおいて、民主主義がはじまったと習ったが、本当の民主主義は海賊船からはじまったという説があつて、その話が好きで、いろんなところで引用している。

海賊船には船長がいて、海賊のメンバーがいて、正規雇用の船乗りもいれば、非正規雇用の船乗りもいたはずだ。仮に全部で三十人の乗組員がいる海賊船。もちろん、指令系統がしつかりとしていないと、舵を動かすことはできないわけで、それでも目の前に嵐がせまっている。右に舵を切るか、左に舵を切るか、意見が別れるような場合もある。皆それぞれの経験に基づいて、意見を出し合うが、どちらか一方に決定しなくてはならない。多数決で決めるとして、十八名が右、十二名が左と分かれてしまった。多数決であれば、十八名が選んだ右、となるわけだが、ここは船の上。三十名全員の協力がないと船は動かない。そうすると、左を選んだ十二名が自分たちの意思とは反対の行動をとらなければならないわけで、はい、そうですか、では勝手にやってくれ、とはならない。少数派が、あいつらはわかつてない、と文句をいったところで、事態が改善するわけではない。目の前に嵐がせまっている。その少数派の協力がなければ、船は嵐の直撃を受けるのだから。船長が力任せに、乗組員を従わせるわけにもいかない。下っ端のやつが従わないといて、海に落としてしまつては、一人でも乗組員を欠いたら、船を動かすことができなくなる。なので、立場がばらばらでも、三十人はそれぞれの意見をもって、話し合いをする。反対の意見だつて、納得できるまで議論を尽くす。そのうえで反対の意見であつても納得して、その決定に従う。

これが、民主主義だと思っし、議会もこうあつてほしいと思ふ。議員の中には、市長が勝手に決めた、と発言することがある。もちろん、議会を通さないなんてことになれば、市長が勝手にと文句もいえるわけだが、二元代表制について述べたが、議会を通っている以上、それは議会の同意があつたわけで、勝手にできるものではない。市長が勝手に、という時は、私の意見を聞かなかつた、という意味で、おそらく何かを勘違いしているのであらう。その勘違いというのが、議員としての立場なのではないか。議員の一般質問、あるいは決議に際しての質疑については、その市民を代表しているわけだから、それには真摯に答える必要がある。そのことを、議員の権力であるかのように勘違いし、自分の意見を聞け、という態度になるのだと想像する。

価値の多様性といわれて久しい。デジタルが進化して、私たちが前提としていた常識や、普通や、正しさはいろいろなかたちに変わってしまった。

政治においては、是か非かを決めなければならない。中間というものがない。ここでは、みんなちがつてみない、は通用しない。「世の中には、両立しない意見の中からどうにかして一つに決めなければならないことがある。」(※3)

例えば、昨年の柏崎刈羽原発の問題。再稼働が是か非かを決めるのは、議会だ。市長が再稼働を容認した。議会もそれを承認した。中間はない。

阿賀野市議会の十六名の議員はそれぞれの立場があり、それぞれの意見がある。所属も違っし、イデオロギーも違っし、地元も違っし。そこでの議論を重ね、議会として判断をする。そのためにも議会での議論を増やし、議会の意見を決める練習が必要だ。

あとがき

こういった報告は慣れていないので、何をどう書いたらいいかのという、試行錯誤ではじめました。議会でも、新人議員らしく、あまり空気を読まなように努めて、発言しています。今回のこの報告でも生意気なところも多々あるかと思いますが、まずは何も知らない新人議員め、とご意見いただけるとありがたいです。

議員になる前に、旧北蒲みなみ農協の理事、阿賀野市社会福祉協議会の理事を仰せつかっております。その時の経験が、今、市議となつて、たくさん学びがあったのだと実感していて、この場をお借りして、感謝申し上げます。



会派「新風あがの」広報担当・会計担当

産業厚生常任委員会

議会運営委員会 副委員長

人口減少対策特別委員会 委員長





SNS で日々の活動をアップしています。

菅原道明市政報告

令和 8 年 3 月

発行者 菅原道明